

監獄としての〈ワタン〉

シリアにおける監獄文学の変遷

岡崎弘樹

I. 祖国と監獄のアナロジー

〈監獄の外も、また監獄〉という発想は、中東をめぐる諸言説の中で決して目新しいものではない。とりわけパレスチナの状況、特に封鎖状態にあるガザ地区を監獄に例えることはもはや国際世論でお馴染みとなっているが、シリアの現代文学においても〈小さな監獄〉(刑務所)と〈大きな監獄〉(国)のアナロジーはしばしば用いられてきた。シリア人作家ヤシーン・ハージュ・サーレハは、16年に及ぶ収監の経験について論考を重ねる中で、次のように指摘する。

我々の監獄は、我々の祖国に似ている。私たち自身にも似ている。政治犯は抵抗し、団結し、疲れ果て、堪え忍び、廃人になることもあれば、与えられた条件の中でなんとか生きようとする。彼らは、収監前も、その最中も、その後も同じ人間であり、象徴的な存在でもなければ、英雄的義務を託された者でもない。¹

苛酷な状況を否応なく受け入れながら堪え忍び、まず人間として生き抜かなければならないという意味では、小さな監獄と大きな監獄において大差はないというのである。パレスチナ人の場合、故国^{ワタン}そのものが占領下にあるけれども、シリアの場合はまがりなりにも領土・主権を有した国家や国民としての〈祖国^{ワタン}〉が前提とされてきた。ところが、後にみるように、シリアの現代史において〈祖国〉は、まるで監獄のようなものとしてさまざまな文学やエッセイの中で比喻として用いられるようになっていく。

シリアの監獄文学については、本稿で後に引用するように既に幾つかの先行研究がある²。だが、〈祖国〉と〈監獄〉の文学表現上のアナロジーについて、いったいいつ頃、ど

¹ Ṣāliḥ, Yasīn al-Ḥājj, *Bi-l-khalāṣ, Yā Shabāb*, Beirut : Dār al-sāqī, 2012, p.109.

² 監獄文学 (prison literature) は、直接的、間接的な収監経験をインスピレーションの源として描かれる文学であり、欧州では特に19世紀以降に多数の作家によって取り組まれた。一方、アラブ諸国においては概して1970年代以降に盛んとなったとされている (Elimelekh, Geula, *Arabic Prison Literature: Resistance, Torture, Alienation and Freedom*, Wiesbaden : Harrassowitz, 2014, p. XI)。ただし後にみるように、ナビール・スライマーンは1970年代初頭に「監獄文学」という言葉を用いたにせよ、アラブのジャーナリズムやアラブ以外の研究者の間で「シリアの監獄文学」と盛んに言われ始めたのは、2000年代以降だと思われる。本論で取り上げるスライマーン、サミ

のような形で始まり、何を意図し、どのように展開したのかについての全体像はほとんど明らかにされていない。多数の作品を通史的、全体的に網羅することは難しいものの、少なくとも 1970 年代初頭には「監獄小説」と言われる分野が萌芽的に示されたことは確かである。そして「大弾圧時代」を経た後の 1980 年代後半～1990 年代には収監経験を取り扱った作品が短編小説という形で生まれ、さらに 2000 年代に入ると長編小説でも書かれ、欧米語にも訳されるようになった。本論では、ほぼ同世代でありながらも、それぞれ異なる時代に活躍した 3 人の代表的なシリア人作家によるそれぞれの作品を取り上げることで、〈小さな監獄〉と〈大きな監獄〉がどのように結びつけられているのかを探る。とりわけシリアの各時代の政治、社会状況を踏まえつつ、作者と読者の間の「お約束」(convention) や「感情の構造」(structure of feeling、レイモンド・ウィリアムズ)の変遷に目を向けることで、監獄としての〈ワタン〉について考えてみたい。

II. ナビール・スライマーンにおける〈閉じられた空間〉としての監獄

最初に取り上げるのはナビール・スライマーン (1945 年 -)³の『監獄』(1972 年) という作品である。スライマーンはシリアの文学界では多作の作家として知られており、2010 年まで小説 18 点、文芸批評 26 点の著作を発表している。シリアの監獄文学はこのスライマーンの『監獄』とその発表の翌年に書かれたエッセイ「監獄文学に向けて」から始まったとされる見方⁴もあり、時代に対する彼の嗅覚がシリア文学史上で〈新ジャンル〉を確立したと言える。

『監獄』では物理的状況に関する淡泊な描写が続くが、逮捕、収監、尋問、拷問、独房、地下室、大部屋への移送、大部屋での共同生活、他の収監者との会話、その対立や和解、そして釈放までの一連の流れが示されている。その意味では、ドストエフスキーの『死の家の記録』を思わせる記録文学としての価値もある。

主人公のワハブという青年は、何故拘束されたのか分からないまま尋問や拷問を受けるが、隣国レバノンから政治ビザを持ち込んだこと、それを指示した組織の代表による何らかの裏切り、あるいは行き違いがあったことが明らかになる。当局側は、「ワハブという名前は偽名で実名はエドワードだ」と主張し続け、本名や素性、関わっている組織や仲間を白状するまで尋問、そして拷問し続ける。たとえば、拷問のシーンは次のように描写される。

ユエル、ハリーフアといった作家も特に監獄を描いた作品に特化しているわけではないことは断っておく。

³ タルトゥース県サフィータ市の出身でダマスカス大学アラビア語科を卒業後、1963～1979 年にアラビア語教師、ラッカ市で校長も務めていたが、1989 年以降に作家業に専念した。

⁴ Sulaymān, Nabil, "Naḥw Adab al-sijn", in *Al-Mawqif al-Adabi*, 1/2, 1973, pp.137-141, mentioned by Taleghani, R. Shareah, "Vulnerability and recognition in Syrian prison literature" in *International Journal of Middle East Studies*, 2017 49(1), p.107.

ワハブはパンツ一丁だった。警官の手がパンツに延び、それをはぎ取ったのでワハブはよろめいた。ワハブは恥部を隠そうとした。あまりに馬鹿げている。この頭のおかしい奴らは何でこんなことをするのか。

「どっちか選べ。タイヤ責めか、こっちか?」、と言われ、目の前にムチが投げられた。「それともこっちか?」。ワハブは3番目のものが何か分からなかった。ワハブの目には、汚れた床が映っているだけだった。そしてこう言われる。「自分で選ぶ前に、全部試してみろや」。

ワハブはタイヤもムチも経験済みだと言おうとしたが、すぐさまタイヤに押し込まれた。すべては天まかせだ。ムチが、さらけ出した手足や背中、胸や背中に打ち据えられた。

「こいつら気が狂っている」とつぶやく。抵抗したいものの、痛くて辛くてできないから、口から出る言葉を叫び、ぶつける。だが、あざ笑われ、両目にもムチを加えられる。ムチ先が下唇に当たり、喉に血が流れるので、警官の一人に向かってはき出した。すると、身体の至るところに燃えさかる雨が降り注いだ。唇以外からも血が飛び出した。男の怒りが収まるまでずいぶん時間がかかった。落ち着くと、再び足や背中に打ち込まれた。⁵

1960年代のシリアで共産党指導者ファラジュッラー・ヘルウのような政治家への拷問はよく知られていたが、『監獄』でもグロテスクな拷問の情景が展開される。地下室へと送られた際には「刑務官が彼を3回もトイレに引いていった。そこで彼の人間性が踏みじられた後、身体は野獣たちの思うままとなり、歯止めはきかなかった」⁶という性的な陵辱を匂わせる陰惨な光景も描かれる。

拘束後1年以上して、ワハブはやっと治安機関の拘置所から出され、別の地域にある刑務所の大部屋へと移送される。そこでまた、他の収監者とのコミュニケーションという別のドラマが始まった。未だイデオロギーと政治が結びついていた1970年代初頭の作品という事情も反映して、囚人らは革命談義に花を咲かせた。ある囚人が「革命における精神主義やロマン主義の必要性」を高らかに主張すれば、もう一人の囚人は「史的唯物論的、世俗主義的な歴史発展の必然性」を強調する⁷。組織活動と家族や恋人との関係もまた、議題となる。「家に残してきた子供らに会いたい」と言い出す者もいれば、「活動目的を成就するまでは結婚しない」と言い張る者もいるし、逆に「家族がいるからこそ、逆境に耐えていける」と認める者もいる。「女との親密な時間を夢見る者はいないのか」という素朴な質問が出て、しばらく沈黙が続いた後、ワハブは一席ぶつ。

⁵ Sulaymān, Nabil, *Al-Sijn*, Latakia: Dār Ḥiwār, 2012[1972], pp.50-51.

⁶ *Ibid.*, p.58.

⁷ *Ibid.*, p.101.

性欲に悩まされていていいんですか？組織のために身を捧げると断言しないんですか？恋愛やセックス、結婚、子供などを夢見ているのであれば、大義に身を捧げる気があるのか疑わしいではないですか？我々は特別な世代です。我々が抱えている課題は他の世代とは違うんです。前の世代も、いずれ不幸に見舞われるであろう次の世代も、組織のために、このおぞましい世界を変えるためにすべてを諦める必要はないでしょう。しかし我々の世代がまさにそれを求められているのです。⁸

やがて密かに持ち込まれた新聞を通して、アルジェリアの収監者3千人が待遇改善を求めてハンガー・ストライキを起こした事実を知ることになる。この報道に影響を受けた収監者らは、同じようにハンガー・ストライキの決行に出た。監獄内での「社会主義的共同体の実験」とも描写されるが、それを率いた者は罰せられ、その後さまざまな矛盾を抱え自殺することになる⁹。

1967年の第3次中東戦争から1970年代前半において、シリアやレバノンでは文学や哲学、思想、記録映画などを含めた政治文化が花咲いた時期であった。哲学者サーディク・ジラル・アズム（『敗北後の自己批判』、1968年）や詩人アドニス（詩雑誌『マワーキフ』、1968年 -）、詩人・劇作家ムハンマド・マーグート（詩集『歓喜は我が任務でなし』、1970年）、劇作家サアダッラー・ワヌス（戯曲『象、時の王よ』、1969年）、記録映画監督オマル・アミララーイ（『シリアのある村の物語』、1972年）など当時の代表的文化人の作品は、今日までシリア国民共有の文化的遺産となっている。スライマーンはこうした時代の雰囲気の中で、政治意識を覚醒させた若者が〈監獄〉に必然的に直面し、さらに監獄が文学と切り離すことのできない課題を提起していることをいち早く察知し、自らの作品に取り入れた作家の一人であった。

とはいえ、この小説においては、監獄はある意味〈閉じられた空間〉として描かれ、外の世界とのつながりを感じさせる要素は弱かった。登場人物は基本的に組織に属する活動家の仲間と、警官や刑務官、警備員といった当局の人間である。面会の際にはワハブの父親や母親もわずかに出てくるのだが、単に泣いているだけの存在として、キャラクターとして多面的な肉付けはされていない。当作品において監獄の問題は、依然として祖国全体というよりは「世代の使命」を担おうとするエリート政治青年の闘争の磁場として位置づけられていた。

III. イブラヒーム・サミュエルにおける祖国と地続きの〈監獄〉

⁸ *Ibid.*, p.110.

⁹ この小説における監獄内でのハンガー・ストライキを分析した論考として Elimelekh, *op.cit.*, pp.122-125.を参照。

1970年代後半は、〈政治文化の枯渇〉が始まった時代と言われている。シリア軍のレバノン内戦への介入や、アサド政権とムスリム同胞団の対立激化、さらに世俗主義政党政員や文化人に至るまでの一斉検挙が続く中、多くのシリア人作家は一時的にレバノンや欧州などに逃れ、シリア内部で芸術活動が公に営まれることはまれとなった。1970年代後半から80年代前半の政治犯総数は、1万7千人と推計されている。一部の政治青年というよりは、あらゆる街区で誰かしら親しい人や知り合いが政府に拘束されているといった状況がお馴染みとなる中、収監経験は国民全体に共有されるテーマとなっていた。

イブラヒーム・サミュエル(1951年-) ¹⁰は80年代後半から短編小説を通じて監獄を描いたが、当時、作家と読者の間に新しい〈お約束〉が生まれていた。スライマーンのように監獄や収監者、刑務官、尋問、拷問といった獄中を直接意味する語彙を並べなくても、「組織」、「大部屋」、「地下室」といったキーワードの一つでも入れれば、監獄が舞台となっていることが、読者に了解されるようになった。サミュエルが短編小説という手法を選んだというのもあるが、恣意的拘束から連行、拘置所への収監、尋問、拷問等とすべてのプロセスを描く必然性もなくなった。そもそも恣意的拘束が日常茶飯事である以上、逮捕や拘束の理由を記す必要すらない。むしろ文学作品として、独房であれ、大部屋であれ、面会であれ、それぞれの場面が予め明示的、暗示的に設定されれば十分であり、そこから作家が描く世界観のオリジナリティーが問われるようになった。

となれば、サミュエルが監獄という空間の物理的状況よりも、監獄に置かれた人間、あるいは監獄の経験を背負った人間の心理的状況に目を向けたのもうなずける。「面会」(1986年) ¹¹という作品は、まさにその典型であった。同作品では、ある囚人が面会で初めて息子と出会うシーンが設定される。拘束時に妻が妊娠していたものの、その後生まれた息子ハルドゥーンには会ったことがない。高鳴る鼓動を抑えつつ、ハルドゥーンに会うわけだが、当初の予想を裏切り、息子に父親として認知してもらえない。妻は妻で何か言いたいことがあるようだが、夫婦のことなのか、組織に託されたメッセージなのかも分からないまま、看守に促され面会は終わってしまう。

サミュエルの監獄文学についてはこの作品も含めて複数の先行研究で分析されているが、〈傷ついたデリケートな感情〉(vulnerability, ḥassāsiya)というコンセプトで説明されている¹²。シリアの記録映画『カーキ色の記憶』に登場したサミュエルが、政権による市民へのおぞましい抑圧行為のエピソードを紹介しつつ、釈放前に将校に「一言だけ言いたいことを言え」と促されて語ったという次のような言葉に耳を傾ければ、この〈感情〉

¹⁰ シリアの短編小説家。1977～80に収監生活。88年に最初の短編小説集『重い足取りの匂い』を出版後、2002年までに4つの作品集を発表。

¹¹ Ṣāmu'īl, Ibrāhīm, "Al-Ziyāra" In *Rāḥat al-khuṭwī al-thaqīl*, Damascus : Dār al-jundī, 1988, pp.21-25; 『中東現代文学選 2016』, pp.207 - 209.

¹² Taleghani, *op.cit.* (脚注4を参照)。

が何を意図しているのか明らかだろう。

ブルグルとヨーグルトは、バケツで運ばれてきた。窓から見ると兵士たちが夜はそのバケツで用を足していた。翌朝、同じバケツで食料を運ぶ。「もし必要なら金を出すから、小使用と食物用のバケツを分けてほしい」。そういう要望を将校に伝えた。切実だからね……シリア人であることで苦しむ状況になぜ追い込むのか。私は〈シャーム〉で生まれたのに、自分をよそ者のように感じてる。そういう疎外感はずみんなが持っている。¹³

サミュエルが将校に訴えたのは、「監獄の解体」や「人間の解放」といった〈大きな物語〉ではなく、むしろ好むと好まざるにかかわらず同じシリアという国で共に生きざるを得ない人間としての〈最低限の感性〉であった。もはや「社会主義共同体」の壮大な夢など、圧倒的な独裁政治（加えて、その国際的な黙認）の前に潰えた時代であり、スライマーンのような観念的な会話や淡泊な描写は成り立たなかった。サミュエルの短編小説において、監獄という状況に置かれた人間が具体的に直面するさまざまな疎外感、そこで負い、後々にまで引きずる肉体的かつ心理的な傷、そしてその癒やし、回復する力(resilience)といったものが主題として設定される¹⁴。かくして尋問や拷問、英雄などいっさい描かれることはなく、むしろ生のディテールに着目することで、その壊れやすい感性や感受性が問題となる¹⁵。

傷ついた精神状態を描く際に、しばしば用いられるのは家族との関係である。「面会」という作品に限らず、出獄後3年を経ても息子に自分を父親として認めてもらえない疎外感を描いた「父親と認められない男」¹⁶（1987年）、大部屋の共同便所の窓から妻と子供の姿を一目みようともがく男の物語「トイレ」¹⁷（1988年）、面会時に妻から手渡された一本のカーネーションの茎の部分に細いピンとともに押し込まれた小さな手紙を読む

¹³ アルフォーズ・タンジュール監督『カーキ色の記憶』(A Memory in Khaki)、カタール、アルジャジーラ・ドキュメンタリー、108分。関連する論考として拙稿「シリアの記録映画に描かれる〈崩壊〉の経験—記憶、表象、他者をめぐる創造空間—」、『唯物論研究年誌』、大月書店、第23号、2018年、pp.215-236を参照。

¹⁴ シリアの芸術作品とレジリエンスとの関係については、Cooke, Miriam, *Dancing in Damascus: Creativity, Resilience and the Syrian Revolution*, London: Routledge, 2017を参照。

¹⁵ シリア人評論家マンドゥーフ・アドワーンは『重い足取りの匂い』に巻頭の辞を寄せ、「政治活動によって血肉化したにもかかわらず、政治的な言葉が何一つみられない。尋問や拷問、衰弱、英雄などもみられない……サミュエルが短編小説で取り組んだのは、極めて個人的な、生のディテールを描くことだ。そこにこそ、政治的なスローガン以上のヒューマニズムがある」と評している(Şamu'îl, Ibrâhîm, *op.cit.*, p. 11)。

¹⁶ Şamu'îl, Ibrâhîm, "Al-Rajil al-ladhi lam yu'add aban" In *Rāḥat al-khuṭwi al-thaqil*, pp.43-52.

¹⁷ Şamu'îl, Ibrâhîm, "Al-Mirḥād" In *Al-Naḥḥāt*, Damascus : Dār al-jundī, 1990, pp.99-117.

「指先サイズの手紙」¹⁸（短編小説集『碧き荒野』、1994年に所収）。サミュエルの諸作品は、スライマーンの『監獄』でただ泣きはらす父母とは全く別の、収監者と家族との関係性の中に物語を位置づけることによって、登場人物の心の内部に生じる微妙な心の動きをとらえようとする。

このように収監者あるいは収監経験者が、家族とつながっていることで、さらに家族関係の背後に広がる社会や国との関係へとつながっていく。すなわち監獄は、決して〈閉じられた空間〉ではなく、一度家族という媒介を通じてシリアの社会や国全体に地続きで広がっていく空間として描かれる。その先に、祖国そのものが〈監獄〉のアナロジーとしてとらえられる発想が示されている。

確かに〈大きな監獄〉は、〈小さな監獄〉と比べても、物理的な条件を異にしている。完全に包囲された空間でもなければ、外の世界とのつながりが完全に閉ざされているわけでもなく、衣食住や人間関係の選択枝は相対的に開かれている。とはいえ、心理的な圧迫感に限って言えば、〈小さな監獄〉に似た閉塞感が漂う。「父親と認められない男」や「入口の下がった家」（同名の短編小説集に所収、2002年）¹⁹といった作品では、出獄後も続く近親とのすれ違いや、心の奥底に染みついた拭いきれない恐怖心が描かれる。出獄中には自身から家族を通して空間的に祖国につながったとすれば、出獄後においても「収監中の空気」(al-ṭāq al-i'tiqāli)²⁰は祖国の中で、あるいは登場人物の精神においても時間的に続いていく。サミュエルは、収監時代への〈郷愁〉すら感じるような心理状態や、監獄の内と外で同様に感じる抑圧感について次のように語っている。

監獄は自分の心の中に刻み込まれているから、私が書いた作品の血液として流れている。拷問は終わったが、その痛みは心の中でずっと続いている。出獄後に光や愛を強く求めても、何故か分からないままに自分を捕らえて放さない恐怖心から自由にはなれない……獄外の生活は、獄内の生活と変わりはない。出口が見えないんだ。ヘリコプターで砂漠の上空をさまよい続けている男のような感覚だ。²¹

¹⁸ Ṣāmu'īl, Ibrāhīm, “Salāmīyatāni min warāq” In *Al-Wa' r al-azraq*, Damascus : Dār al-jundī, 1994, pp.73-83.

¹⁹ Ṣāmu'īl, Ibrāhīm, “Al-Bayt dhū al-madkhl al-wāṭi'” In *Al-Manzil dhū al-madkhl al-wāṭi'*, Beirut : Mu'assasat al-'arabiya lil-dirāsāt wa al-nashr, 2002, pp.97-103.

²⁰ Ṣāliḥ, Yaṣīn al-Hājj, *op.cit.*, p. 120. なお、サーレハの場合、16年収監されて釈放された後、少なくとも10年くらいは日常生活に適応できず、収監前に政権に追われる身であった数年間を入れると「収監中の空気」は合計で30年間くらい続いたという(Ṣāliḥ, *op.cit.*, p.131)。

²¹ Cooke, Miriam, *Dissident Syria: making oppositional arts official*, Durham: Duke University Press, 2007, p.128; Cooke, Miriam, “The Cell Story: Syrian Prison Stories after Hafiz Asad” In *Middle East Critique*, Vol.20, No.2, 2011, p.178.

獄外の生活を舞台とした物語においても「収監中の空気」とは無縁ではない。「闇」²²(1990年)という作品は、映画上映中に突然起こった停電の中で、人々の日常の不満が爆発するという、特定の場面に象徴化された抑圧の内面化とその反動に着目した。「人々、そして人々」²³(1990年)という作品は、市バスに乗り合う乗客が乱暴な運転の最中で騒ぎ出した一コマを題材にし、どこへ向かうのか分からないがとにかく黙ったまま濁流に流されている情景を描き出した。物理的状況は異なれど心理的状況に目を向けることで、〈傷ついたデリケートな感情〉が、〈小さな監獄〉と〈大きな監獄〉の共通因子として導かれている。一見、監獄とは無関係の空間に見えながらも、監獄と祖国は、収監者の感性、あるいは文学的なインスピレーションにおいてあくまで地続きなのである。

IV. ムスタファー・ハリファにおける祖国の暗部としての〈監獄〉

サミュエルは2000年代以降、ほとんど短編小説を書くことはなくなった。諸々の理由があるが、その大きな一つは、長々と続く同じ独裁体制の継続下で自分が描こうとした〈感性〉が決して社会の中で広く分かち合われることはないという諦念があったとみられる。言論自由化の中で、テレビドラマや娯楽映画などでも収監経験が気軽に扱われる一方、本当に痛み、苦しんだ人々の〈デリケートな感情〉がないがしろにされていると感じていたように思われる²⁴。とはいえ、その一方で、2000年代にはそれまで無名であったシリア人作家の手によって、監獄を描く新たな作品が登場した。あまりに厳しい現実故に「絶対的監獄」²⁵とも言われるパルミラ刑務所の経験を描いたムスタファー・ハリファ(1948年-) ²⁶の『巻き貝：のぞき見の日々』(2008年)は、その代表格であった。

当作品は恣意的拘束から、連行、尋問、拷問、拘置所、大部屋での生活、そして十年以上を経た上での釈放、さらにその後の顛末に至るまでの一連の流れを描いているという意味では、形式的にはスライマンの『監獄』とさほど変わらない。だが、大部屋の状況や日々の食事、他の収監者との会話、ごく例外を除いて実現しない面会、容赦のない暴力の前で廃人と化し自らの意志すらも分からなくなる精神状況、恐怖という感覚すらも麻痺する孤絶の空間の一つ一つの詳細について、やはりパルミラ刑務所での実体験を有する者でないと書ききれない描写が多い。パルミラの地獄で味わう身の毛のよだつ

²² Šāmu'īl, Ibrāhīm, "Al-'Atma" In *Al-Wa' r al-azraq*, pp.9-14; 『中東現代文学選 2016』, pp.210 - 212.

²³ Šāmu'īl, Ibrāhīm, "Al-Nās...al-nās" In *Al-Naḥḥāṭ*, pp.9-15.

²⁴ 日本における監獄言説の「消費言説化」については、副田賢二『〈獄中〉の文学史—夢想する近代日本文学』, 笠間書院, 2016年, 第6章を参照。

²⁵ Šāliḥ, *op.cit.*, p. 110.

²⁶ シリアの小説家。仏留学後に、1982~94年に収監。実際にパルミラ刑務所での生活も経験している。最新作に『墓踊り』(2016)がある。

ような経験からすれば、そもそも〈デリケートな感情〉を文学的に表現しようということすら不可能なほどのリアリティが存在している。

拷問だけでなく、絞首刑も日常生活の一部であることは、この無慈悲な現実を示す最適の例である。ヘリコプターで砂漠の収容所にやって来る治安機関幹部だけでなく、同地に勤務する将校らも彼らの言うところの「裁判」を開き、新たに処刑する者を恣意的に、気まぐれに決めてきた。将校らが拘留者リストの中に齢70代の父親とその息子3人の一家を見つけた後、その父親を呼び出して同僚の間で下品な冗談を交わしながら、「一家4人のうち、3人を絞首刑に処すので誰か選べ」とまるで暇つぶしのように言い放つ。究極の選択を迫られた父親は、迷いに迷った挙げ句「自分も含めて、既に子供のいる上2人の兄は犠牲となったとしても、せめて未婚で子供のいない末の息子だけは生かして欲しい」と懇願した。だが、後に同じ日に公開処刑執行の対象者として言い渡されたのは父親ではなく、末っ子も含めた3人の息子の方であった。父親は執行前に身を清める3人の息子にお別れの言葉をかけることすらできない。物心ついて以来日々宗教的義務の履行を欠かしたことがないにもかかわらず、アッラーによる試練としてはあまりに残酷ではないかと、その存在すらも疑うような精神状況に追い込まれる²⁷。ハリーファは、アルジャジーラの「テキストの外」という番組でこの逸話に言及しつつ、究極の試練を前にした本来信心深いはずの父親の、揺れに揺れ、ある意味倒錯した心理状況について次のように説明する。

父親にはアッラーがこの残虐の極みを許していることが受け入れられない。アッラーはどこにいるんだ？なぜアッラーは介入して抑圧されている者を救わないのだ？と思うのだ。あまりに苛酷な現実により、段々とアッラーの存在を疑うようになる。しかし、同時に深い信仰心が呼び戻され、アッラーの存在を疑ったことに対してアッラーに許しを求めるのだ。²⁸

宗教的な側面に関連して言えば、当作品におけるイスラーム主義者の描かれ方も注目に値する。主人公（私）はキリスト教徒のコミュニティ出身者とされ、世俗的な人間（ムルヒド）である一方で、彼を除いてほぼ全員ムスリム同胞団員の収監者と同居生活を続けていると設定されている。監獄内で公には礼拝禁止であるどころか、そもそも声を張

²⁷ Khalifa, Muṣṭafā, *Al-Qawqaw'a: Yawmiyāt mutalaṣṣṣ*, Beirut : Dār al-ādāb, 2008, pp.244-248. なお当作品は、少なくとも英独仏伊語に翻訳されている。英訳版として Khalifa, Mustafa, *The Shell: Memoirs of a Hidden Observer*, trad. by Paul Starkey, Massachusetts : Interlink Pub Group Inc, 2016 を参照。

²⁸ Khalifa, Muṣṭafā, Interview in “Khārij al-naṣṣu”, Al-Jazeera 衛星放送チャンネルで2016年11月26日に放送 (<https://www.youtube.com/watch?v=F3tzd8oGUFo> 2018年8月31日にアクセス)。

り上げて話してはならず、人と目を合わせてもいけない。だが、イスラーム主義者の関心や話題は概してクルアーンとスンナに限られており、主人公とはコミュニケーションがほとんど成り立たない。それどころか主人公は、「キリスト教徒コミュニティ出身者」というだけで同居者からは敵対的な存在、あるいは当局とつながるいぶかしいスパイのように扱われる。それ故に、精神的にも、物理的にもますます引きこもっていくのは必然であった。たいていの場合、毛布をかぶり、僅かに空いた穴から周りの様子をのぞき見する、観察する生活を送る。題名の通り、アラビア語で「自分にカウカアする」、すなわち「殻に閉じこもる」、引きこもりの日々が続くのである。

スライマーンやサミュエルの監獄文学には、イスラーム主義者は登場しない。物語の中心となるのはあくまで当局側の人間と、世俗的な主人公とその家族や同志である。一方、『巻き貝』や『憎しみの賞賛』（ハーリド・ハリーフア、2006年）²⁹をはじめとする2000年代のシリア文学作品において、イスラーム主義者はしばしば登場する、あるいはストーリー構成上欠かせない存在となっていた。それが、同時代のシリアの社会動向を反映していたことは確かである。「ダマスカスの春」（2000年）と呼ばれる都市有識者中心の民主化運動は頓挫したものの、その後に非政府系の宗教慈善団体の活動が活発化した。国会においては初のイスラーム系議員（ムハンマド・ハバシュ）が当選し、長期にわたって国外亡命生活を強いられてきたムスリム同胞団員の帰還運動に取り組んだ他、ウマイヤ・モスクではムアーズ・ハティーフ師（後の反体制派代表組織「シリア国民連合」議長）のようなリベラルな意識を有した宗教指導者の名が知られ始めた。一方、アサド政権側も共和国大法官やその他の高名な宗教指導者、さらにはヒズボラーに至るまで体制維持に有用なお抱えのイスラーム聖職者や域内勢力を大いに活用し始めた。体制側と批判勢力側がそれぞれの思惑で、それぞれの〈イスラーム〉を掲げるという、「イスラームの春」³⁰と呼ばれる現象が生じた時代でもあった。

イスラーム主義者は、その勇気や倫理観において世俗主義者から一目置かれているにせよ、〈書く〉という行為に秀でている者はまれにしか存在しない点には言及しておく必要がある。サーレハが認める通り、イスラーム主義者にとって、自らを監獄に追いやったのは、アッラーを恐れぬ「悪しき支配者」に他ならず、悪政もまたイスラームの理想の共同体に至るための「アッラーの長期計画の一部」である以上、この計画に身を委ねさえすれば、自己と共同体の矛盾は生じないと意識される³¹。予定調和的な観念に囚われている彼らには、〈自己と共同体の分裂〉という近代小説の基本的なモチーフは概して無縁である。イスラーム主義者が自らの抑圧の経験を広い読者層の共感を得ることの

²⁹ 1970年代後半～80年代前半のアサド政権とムスリム同胞団の衝突を扱った作品。

³⁰ Pierret, Thomas, *Baas et Islam en Syrie : La dynastie Assad face aux oulémas*, Paris : Proche Orient, 2011などを参照。

³¹ Sâlih, *op.cit.*, p. 117.

できるような形で言論として書き残すということは極めてまれである。

しかし、たとえイスラーム主義者と経験を分かち合うことが困難であったとしても、長期にわたる現実の収監生活が人間としての新たな「連帯」を生み出したことは否定できない。十年以上もイスラーム主義者と同居する『巻き貝』の主人公も、一貫して引きこもりの生活を送ったわけでない。病気や老人の身代わりとなって自ら鞭打ち 500 回を受けようとする屈強な自己犠牲的なジハード戦士（フィダーイーン）にも一目置いていたが、気づけば自らもクルアーンを完璧に暗記していた。加えてイスラーム主義者が決して一枚岩ではなく、暴力的な闘争を信奉する過激派もいれば、穏健かつ平和的な形での改革を求める集団が多数派であることにも気づいていく。過激派に属する者をよく知れば、年端もいかない素朴な青年である場合も多い。当然ながら息子 3 人を処刑された父親のために行われた集団の礼拝には、主人公も参加することとなる。長く生活を共にし、さまざまな発見や経験をすることで、主人公は獄中で最も気の合う友人ナシームと出会う。家庭の事情で医師となったナシームは本来画家を志すほど芸術に飢えていた青年であった。収監生活の後半、主人公はこの知己のおかげで「3 日が 3 年に感じるような空間」³²を十年以上も生き抜くことができた。世俗主義者とイスラーム主義者というイデオロギー的な立場は別として、監獄であれ祖国であれ、世界から見捨てられた奈落の底で共に生き抜かざるを得ない以上、人間と人間として共感し合う面が生じるのは当然であった。

とはいえ、パルミラ監獄に収監された者は通常、家族訪問も許されなければ、また拘束の事実すら家族に伝えられない。外界との完全な断絶が十年以上にもわたって続いた後、社会復帰のための訓練や期間もなく突如社会に放り出されたところで、適応障害を起こしてしまう。獄外の社会は常に変わり続けている一方で、孤絶状態に置かれた囚人にとって獄外生活のイメージや認識は変わっていない。囚人の時計の針は、拘束されたあの日からほとんど進んでいないのである。

『巻き貝』の主人公は、父親の残してくれた財産と親戚の助けのおかげで新たな生活に向けて一歩踏み出すことができた。その一方で、遅れて出獄したナシームには妹一人しか残されていなかった。ナシームの両親は行方不明となった息子を探して当局者を尋ねて廻ったが、何ら手がかりを得ることのないままに既にこの世を去った。その後十年以上ももはや死んでいるものとみなされながらも、帰ってくれば帰ってきたで妹の夫に犯罪者扱いされ、さらに両親の家もその夫に奪われた。ナシームは、やがて行く当てもなくさまよい、獄外でのあらゆる血縁や人とのつながり、生きていく希望を失い、再び廃人と化した。結局ナシームは、建物の 6 階から身を投げる他なかった。外部から完全に断絶されたパルミラの地獄から奇跡の生還を果たしたにもかかわらず、その外にはま

³² Khalifa, *op.cit.*, p.308.

た別の苦悩、すなわちサミュエルの提起した祖国と地続きの〈監獄〉に放り込まれ、身動きがとれなくなってしまったのである。

VI. 結語に代えて

〈小さな監獄〉と〈大きな監獄〉を安易に結びつけることについては、さまざまな留保がつけられる。たとえば、ヤシーン・ハージュ・サーレハは次のように指摘している。

我が国の獄外の状況を単に大きな監獄とみなす者が多数いる……監獄での抵抗と解放の経験を、彼らが言うところの〈大きな監獄〉からの解放に導くための例としているのだろう。〈小さな監獄〉で解放が可能となれば、〈大きな監獄〉でもそれが可能となると言いたいのだ……。しかし、私には、監獄外の生活を監獄内と類似させたり、実際の監獄を大きな監獄の縮小版ととらえる見方は受け入れられない。現実の刑務所を軽んじ、囚人の苦痛や苦悩をないがしろにしているだけでなく、実際の監獄経験を抹消し、政治的課題として誇張しているからだ。同じく〈大きな監獄〉を解放する手段を編み出すことに真剣に取り組んでいないという問題もある。³³

感覚的なイメージとして祖国と監獄を結びつけたとしても、両者の物理的条件が全く異なることは当然である。より大きな世界とつながる国や社会の解放は、政治や経済、教育、社会をはじめとする無数の側面と結びついており、獄内における「解放」とは全く別の論理を必要としていることも自明である。生活の様々な面における相対的な選択肢を与えられた獄外の状況と、外界と遮断され、当局の完全な恣意的権力の下に置かれるだけでなく、拷問や処刑が日常化し、恐怖の感覚すらも麻痺してしまうようなパルミラの獄内を同列に並べることはできない。ムスタファー・ハリーファが認めるように「シリアの監獄で味わった人間的な苦しみの規模からすれば、言語であれ、文学であれ、それを表現することなど、そもそも不可能である」³⁴。つまるところ、監獄生活における現実の苦しみやうめきと、その経験を表現し文学作品に昇華させたものの間には大きな〈隔たり〉がある。サミュエルが認める通り、生きているのか死んでいるのか分からないような監獄の生活は、クルアーンがイメージする現世と来世の〈狭間〉(barzakh)でさまよっていることと似ているのかもしれない³⁵。

³³ Sālih, *op.cit.*, p.110.

³⁴ Khalifa, Muṣṭafā, Interview in “Kātib wa mu‘arid sūrī Muṣṭafā Khalifa : Anā min funāka”, Orient News 衛星放送チャンネル (<https://www.youtube.com/watch?v=48oaSadCQWc> 2015年7月19日に公開。2018年8月31日にアクセス)。

³⁵ Cooke, Miriam, *Dissident Syria*, p. 125. クルアーン第23章第100節において、バルザフは一般的に英訳では barrier、日本語訳では「障壁」と訳されている。だが地峡や海峡という意味もあり、「戻ることを阻む隔たりの空間」のイメージとしてとらえられる。

しかし、まさにこの〈狭間〉において空中に漂い続ける感覚こそが、心理的な描写を可能にし、監獄の内側と外側を結びつけ、たとえ氷山の一角であったとしても監獄経験を文学作品として結実させた。サーレハも監獄を祖国のイメージと強引に結びつける俗流言説、あるいは英雄主義的な言説を批判しているのもあって、サミュエルやハリーフアのような優れた文学者の作品を批判しているわけではない。むしろ収監経験者が、自らの経験を受けとめ、他人に任せることなく、それを書き、表象させることで新たな政治文化を創り出す可能性を強調している。それは「自身の健全な人生を取り戻し、亀裂を埋め、傷を癒す試み」であり、「独裁政権によって引き裂かれる生に対する抵抗」である。〈小さな監獄〉であれ、〈大きな監獄〉であれ、監獄経験を自ら書くことは、過酷な条件下で「人間的な余地を救い出すための努力」³⁶であることに変わりはないというのである。

事実、1970年代、80年代後半～90年代、2000年代のシリアで監獄を扱った小説を3つ並べてみるだけでも、〈小さな監獄〉と〈大きな監獄〉の相関関係が変化していることは明らかである。すなわち70年代前半は依然として小さな監獄が〈閉じられた空間〉として描かれていた。だが、70年代後半～80年代前半の弾圧経験を国民的な記憶として共有する中で、収監経験のある作家は〈心理的描写〉にこだわることによって、監獄という空間がシリアの社会や国と地続きになっているという認識を示すようになる。まさに「祖国を祖国として感じられない」、「シリア人であることが苦しい」という感覚は、監獄という場で最も鮮明な形で再確認され、文学的なインスピレーションの源となった。さらに2000年代となれば、従来のフィクションでもノンフィクションでも語られてこなかったおぞましい現実を再び小説の中で表現しようとする取り組みが生まれた。コンラッドの『闇の奥』を想起させるが如く、パルミラの監獄は、やはり完全に閉ざされた空間というよりは、シリアという国のあらゆる矛盾や暴力を象徴的に示す暗部として描かれた。とはいえ同時にそこではイスラーム主義者も、世俗的な主人公とは無関係で理解不可能な〈他者〉ではなく、主人公と地続きの存在、あるいは〈祖国の一員〉としてとらえられ、世俗と宗教の壁を乗り越えようとする来るべきシリアの〈祖国〉のあり方が予兆されていたと考えられよう³⁷。

³⁶ Saliḥ, *op.cit.*, p.110. なお本論で取り上げた3人の作家の内、最初のスライマーンは自ら収監された経験に基づいて小説を書いたわけではないが、後の2人であるサミュエルとハリーフアは実体験に基づいて文学作品に仕上げたことは言及に値する。

³⁷ 本論の主題としては扱いきれなかったが、2011年以降、かつての収監経験が、文学作品の中で監獄と祖国のアナロジーの形を取りながら警告的な意味合いを込めて表現されたにもかかわらず、国民的精神として結実しなかったことは確かである。むしろ長きにわたって文学作品の中で描かれてきた監獄の闇は、もはや実際の監獄のみならず、祖国全体を覆うことになった。革命青年らを人道面で支えるべく、ダマスカス郊外の激戦地東ゲータに向かった先述のヤシーン・ハージュ・サーレハの妻サミーラ・ハリールは、2013年に政府軍に完全に包囲され、水や食糧、医薬品も尽き、さらには化学兵器による大量殺戮に晒されるという地獄を経験する中で、かつての収監経験(1989

～93年)を思い出し、手記に次のように記している。「監獄、どう言ってもいいのかわからないけど、自分がかつて収監された監獄なんて何でもなかったわ。かつて私は、ホムスの治安機関の拘置所から、パレスチナ系治安機関の拘置所、そしてドゥーマの刑務所に移された。どこでも尋問は1週間続いたけど、食事にありつけた。だけど包囲されている今、ホント何もない。医薬品も水も、電気もよ。何もないの。ホントに。死ぬことすらも忘れたわ。孤独だけがあふれている。犠牲者のいない家庭、拘束された者のいない家庭、体の一部を失った者がいない家庭などないわ」、「祖国はあなたの家族であり、恋人であり、隣人であり、友人であり、街区であり、街であり、通りなのよ……もし祖国が人間であれば、あなたのことを感じるはず。地中から地震を起こして、野蛮な殺戮者を一掃するはずよ」(Khalil, Samira, *Yawmiyāt al-ḥiṣār fī dūmā* 2013, ed. Yāsīn al-Ḥāj Šāliḥ, Beirut: Al-Muʿssasat al-ʿarabiyya lil-dirāsāt wa al-nashr, 2016, p.75, p.84、なお2013年12月に彼女はイスラーム主義者に拉致され行方不明となっている)。かかる記述から明らかなように、もはやシリアの文学者らが取り組んできたような〈監獄〉の厳しい現実から〈祖国〉の行方を模索するという方向性は成り立っていない。むしろ戦火と包囲の下で人々が逃げ惑い、飢え苦しみ、生死をさまよう〈祖国〉の方が〈監獄〉よりもあまりに悲惨で、苛酷だという有事の現実を突きつけられている。少なくとも2010年代において多くのシリア人作家は、「監獄」よりもいっそう厳しい「墓場」や「地獄」と化した祖国の経験を必死に記録することからしか始めるほかないと自覚している。2000年代までの監獄「文学」と2010年代の「記録」が将来的にどのように有機的に結びつけられ、新たな表現を生み出し得るのかについて、その全体的な青写真は依然として定かではない。